

江戸の漫画を楽しむ①

漫画の成り立ち

江東区深川江戸資料館

「漫画」という言葉から連想できるものといえば、コミックをはじめとするコマ割りや、セリフが吹き出しで表現されているものを想像すると思います。

江戸時代にも「漫画」があり、そこには世情や人々の暮らしが戯作的表現で描かれ、現在のわたしたちと同じように江戸庶民の人々に親しまれていました。

資料館ノートでは本号から 3 回にわたり、江戸時代の漫画について紹介します。今回は、漫画の概要と、その成り立ちについてみていきます。

1. 「漫画」とは

漫画とは、『広辞苑』によると、単純で軽妙な手法で描かれた、滑稽と誇張を主とする絵のことをいい、主に社会批評や風刺を取り入れた戯画等。また、絵を連ね、多くはせりふをそえて表現した物語、とあります。

「漫画」という言葉の由来は、中国に古来「漫筆」という言葉があり、「そぞろがき」「随筆」という意味で使われていました。それが日本に入り、「漫筆画」から「漫画」になったと言われています。

刊本に漫画という言葉が初めて使われたのは、鈴木煥卿が著した『漫画随筆』(明和 8 年・1771) ですが、その内容は漫画についての随筆本ではなく、

絵や図も入っていません。

読み方についても、寛政 10 年(1798)刊の『しじのゆきかい 時交加』序文で著者の山東京伝が、「漫画」を「マンガワ」と呼び使用しています。内容は、江戸市中の人々の風俗を四季に即してつづった随筆ですが、この本がヒットしたことにより「漫画」という言葉が人々の目に触れるようになります。

このように漫画という言葉は、18 世紀に登場して江戸庶民の人々に親しまれていくこととなります。

2. 江戸時代以前の漫画

日本の漫画の歴史は古く、その始まりは諸説ありますが、古くは法隆寺金堂の天井や正倉院に残る古文書「だいだいろん 大大論」(天平 17 年・745)、唐招提寺のとうしょうだいじ ほん 梵天像台座の裏に描かれた人物などのなかに戯画をみることができます。その後、絵巻の登場にともない戯画も「ちようじゆうじんぶつ ぎ が 鳥獣人物戯画」や「ひやつきや こうず 百鬼夜行図」など広く知られている絵巻のなかに登場します。これらは肉筆画で、限られた人たちしか見ることができませんでした。このような状況は、18 世紀初頭に至るまで続くこととなります。

「鳥獣人物戯画」は、兎や蛙、猿など擬人化され



「鳥獣人物戯画」(部分)
鳥羽僧正(覚猷)伝
平安末期～鎌倉時代
高山寺 蔵

た動物たちが水遊びや相撲、法会（仏事・法要のこと）などを行う様子が描かれています。そのユーモラスな表現は、日本の漫画やアニメーションのルーツともいわれています。筆者の鳥羽僧正（1053～1140）は、平安時代後期の天台宗の僧で、戯画を得意としたと伝えられている人物で、のちの鳥羽絵の語源となったとされています。

3. 大津絵

大津絵とは、近江国（滋賀県）大津の追分あたりで土産物として売られていた民衆的な絵画で、「追分絵」とも呼ばれています。その始まりは明らかではありませんが、江戸時代初期にまでさかのぼることができます。

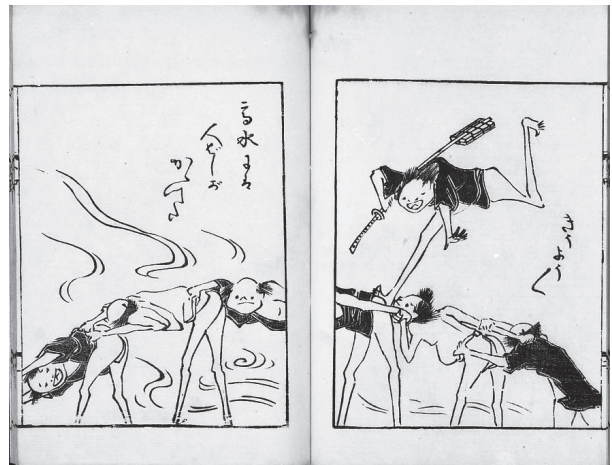
大津絵は、東海道を往来する旅人の手軽な土産物として各地に伝えられています。初期の大津絵は仏画が描かれていたので、幕府のキリシタン弾圧政策に伴って、人々はキリシタンではないことの証として多く買い求められました。

その後、大津絵は、仏画よりも世俗的な絵が主流となっていきます。そのなかで、題材も豊富になり戯画風のものや風刺的意味を持つものが登場するのが特徴といえます。なかには鼠や猫、猿などの動物や鬼を擬人化して登場させ、滑稽な役回りをする風刺的なものも多く残されています。とりわけ鬼は、本来の悪役が滑稽な役回りをするため風刺の意味が強く、大津絵のなかに多く登場します。

4. 鳥羽絵

鳥羽絵は、広く戯画や漫画を指す言葉として使われることもあります。限られた言葉では18世紀前半に大坂を中心に流行した軽妙な筆致の戯画を指します。その名称は、「鳥獣人物戯画」の筆者と伝えられている鳥羽僧正に由来します。

鳥羽絵の特徴は、人物の手足が極端に細長く、目は黒丸か「一」文字式に簡略化され、鼻は低く、口が大きく、また描線も簡潔です。長い手足は「動き」を表現し、躍動感のある画面を作り出しています。そ



『軽筆鳥羽車』
享保5年（1720） 町田市立博物館 蔵

こには、人々の様々な騒動が描かれており、その様子は見るからに馬鹿馬鹿しいが表情豊かで躍動的に描かれています。

上図の鳥羽絵本は享保5年（1720）に出版されたもので、ことわざを鳥羽絵スタイルで描いたものです。

また、江戸時代の木版技術の普及により、同時に同じものを制作することが可能になったため、庶民のなかへ広く浸透していき、商品としての「漫画」が登場したといえます。描かれるテーマも庶民の生活に向けられているものを主としていたので、庶民は受け入れやすく、その軽妙で面白おかしい描写に笑ったことと想像できるのではないのでしょうか。

鳥羽絵の人気は江戸の浮世絵にも影響を与え、その後、鳥羽絵は鋳形蕙斎『略画式』（寛政7年・1795）や葛飾北斎『北斎漫画』（文化11年・1814～明治11年・1878）などを経て明治時代のポンチ絵に続いていきます。

版本という形で庶民へ広がっていった漫画は、同時に多色刷りの見栄えのする戯画浮世絵や風刺画として発展していくこととなり、葛飾北斎や歌川広重、歌川国芳などの絵師たちの作品が数多く残っています。

【主な参考文献】

清水勲『漫画の歴史』（岩波書店/1991）

『大津絵』（町田市立博物館/1996）

清水勲『日本近代漫画の誕生』（山川出版社/2001）

清水勲『江戸のまんが』（講談社/2003）